

# 椎名麟三「公園の詩人」論\*

—ドストエフスキー「大審問官」物語を手がかりに—

金慶湖\*\*  
kkhbtfy@hanmail.net

## <目次>

- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1. はじめに       | 4. 「二人」をめぐる |
| 2. 作品の謎たち     | 5. むすびに     |
| 3. 「接吻」を手がかりに |             |

主題語: 椎名麟三(Rinzo Shiina), 推理小説(Detective novel), ドストエフスキー(Dostoevskii), フランツ・カフカ(Franz Kafka), イエス・キリスト (Jesus Christ), 復活(Resurrection)

## 1. はじめに

椎名麟三の最初の推理小説は、昭和二十九年の「罪なき罪」で、雑誌「文芸」の 推理小説特集 としてであった。この企画について、当時の推理小説ブームに便乗しようとする編集部とそれに応じる戦後派作家たちを引っ括めて「文学のダラク」<sup>1)</sup>と詰難する人もいれば、「エンターテインメントなんかには暇をつぶすより」<sup>2)</sup>、ちゃんと仕事をやれと揶揄する人もいた。決して評価がよかったとは言えない。それでも椎名は推理小説を書き続け、「待合室」(同三十年)、「公園の詩人」(同三十一年)、「新作の証言」(同三十二年)などを次々と発表した。もちろん戦後派の売れっ子作家の一人のことはあって、推理小説ばかり書いていた訳ではなく、文部大臣賞(文学)受賞を誇る「美しい女」(同三十年)などの代表作を書いたのも

\* 本稿は、第39回国際学術大会(2019年5月18日、於全北大学)においての口頭発表を基に執筆したものである。会場でご意見をくださった方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

\*\* 韓南大学 日語日文学科 講師

1) 平野謙(1954.2.2.)「二月の文芸作品を読む」『北海道新聞』

2) 佐々木基一(1954.2.1.)「文芸時評」『日本読書新聞』

この時期のことである。

さて、本稿で取り扱おうとする「公園の詩人」は、発表当時からほとんど注目されることもなく、これを論じた先行論はおろか、一言触れている時評さえ見当たらない。そもそも、この作品のみならず、椎名の推理小説に関する研究自体が無いと言ってよい。

ところが、「公園の詩人」は、純文学でない「暇潰しの一つとして片付けるにはどうも後味の悪い謎たちが多く、意味ありげにあちこちに散らばっていて、しかもその謎たちは、推理小説だというのに事件と何の関係もない。そこで、ふと思ひ浮かぶのは、作品の構成と無関係な謎たちがそこに敢えてあるというのは、推理小説ならではの謎解きのためではなく、作者の文学世界を読み解くための何かしら重要な手がかりなのではないかということである。それらを探っていけば、分かりづらいこの作品の真意、椎名の思考の核心を理解する端緒につながる気がするのである。

と言うのも、同じことを言うようだが、この作品にはこれといったトリックもそれをめぐる推理の因果関係も説得力が弱い。とうてい出来のよい推理小説とは言えない。言ってしまうと推理小説と呼んでいいかどうかさえ悩ましい。しかし作者は、最初「小説新潮」に発表したのち、『文芸推理小説選集2』(文芸評論社、同三十二年)に再録している。世に二度問うほど、さぞ作者自身作品への愛情があり、「推理」の名の付く企画に載せた訳だから読者に「推理」してもらいたい何かがあった筈である。

以上述べた疑問点を踏まえて、本稿では、作品のなかの謎たちを手がかりに、果たして椎名は推理小説として難点の多いこの作品で何が言いたかったのかという、「推理」の名の裏にあると思われる作者の真の主張に迫りたいと考える。

## 2. 作品の謎たち

「公園の詩人」は、昭和三十一年十二月号「小説新潮」に発表された。元教師であった主人公(松田徳松)は近所の近くの公園に来ると必ず「詩人」とでもなったように理由もなく陶醉し、「全ての人間を愛し」、「全人類を愛し許すことができる」感情に耽ける。「すべてはいいのだ」、「すべての人間は許されているのだ」と。

あの夜も、いつもの人類愛に燃える詩人の気分で公園にいた。公園から見える工場は夜業でもやるのか沢山の窓が明るく光っていて、グラウンドには二匹の野良犬が戯れてい

る。空には星があつて宇宙の神秘がまばたきをするようであつた。松田は感激して涙を流した。向うの外灯の近くのベンチには老人が一人座っていた。寂しそうな老人を見つけた松田は、やさしく話しかけてやりたくなり、彼に近づいた。老人は居眠りの最中のようだったが、松田は彼のとなりにそつと座り、親近感を込めて声をかけた。「今晚は、静かな晩ですね」。しかし老人は何も答えない。松田は老人の肩を揺すりながら「もし、もし、風邪をひきますよ」と言った。すると老人は、ぐらりと松田の方へ倒れかかって来て、あいにくも老人の唇が松田の手の甲に当たる。思はず飛びのいて叫び声をあげた彼は、無我夢中で公園を走り出して行った。そして行き当たる人毎にたわ言のように言った。「人が死んでる。人が死んでる」。

松田の高揚した気分はそれを境に奈落に落とされ、老人の接吻は「死の烙印」のように感じられた。「何の罰で自分はこんな目に会わなければならないんだろう」と思った。そのとき彼は、何か思い当たる罪のようなことを思いだす。それは、公園に出かけるようになって間もないことであつた。公園で偶然、昔の教え子(清澄愛子)に会つた彼は、当時の「成績もよくなく顔もよくなかつた十五年も前のやせた少女の姿」を思い出す。彼は、二十五歳の立派な大人になっている彼女に、いつもの自分の思想を情熱的に力説する。「人類愛!人類愛って素晴らしいもんなんだよ」、「その愛はあたたかくすべてのひとを包むんだ」と。彼女に会つたのはそれだけであつた。しかし、その日から彼の心の中にある期待がひそかに生まれたのであつた。それは、愛子でもなく他の誰かでもない、「いわば彼の全生活をかえてくれるようなものを待つ漠然としたしかし甘い期待」で、そのような詩心や恋心のような感情こそ、中年男の恥ずべき罪ではないか、と思つたのである。

しかし、その翌日から気のせいかどうか分からないが、老人に「接吻」されたところが神経痛にかかつたようにこわばるように痛くなつてきた。そして、翌日の夕刊新聞である老人が「青酸自殺」したということが分かり、もはや呪われた気分に取り付かれた彼は、自分も自殺するだろうと思う。そこで彼は、その呪いから逃れようと、新聞に書かれている死んだ老人の住所を訪ねる。丁寧に迎えてくれた老人の妻と妾に対し、松田は、ご主人の飲んだ青酸カリの瓶でも舐めたのか、公園に一匹の野良犬が死んでいるのを見たと言つて嘘をつく。そして、彼女たちがその死んだ犬の死体の処理に出かけるかどうか確かめようとする。

家から出た彼が道の曲がり角に身をひそめていると、「先生!」と、前会つた昔の教え子の愛子がニコニコ笑いながら彼に話しかけて来る。その時、例の二人が家から出て来たので、松田はギョツとして慌てて隠れたが、すぐ彼女たちを追いかけはじめた。訳の分から

ない愛子もその尾行に付き合う。やがて、死んだ犬が見つかるはずのない二人が公園から引き返すと、松田と愛子の尾行も終わった。愛子はあの二人が何を探していたのかを知ろうとするように彼女たちの探していたところを確かめて回っていた。

松田は愛子と別れ、一回家に戻ってきたが、やはりあの二人、老人の妻と妾に、死んだ犬を探したのは何故かと直接聞こうと思い、老人の家を訪れる。すると、またそこで愛子が彼を呼びとめて、彼が自分に会いに来たと思い、嬉しそうにしゃべりつづける。二人はタクシーに乗り、小さな旅館の前で降りた。いよいよ犯人を暴き、探偵の推理と犯人の自白を聞く場面が来た。部屋に入った愛子は彼に「接吻」しようとした。すると、松田は彼女を突き放し、「どうしてあの老人を殺した」と問いただす。彼女は顔色をかえ、ふるえ出した。

彼女が老人を殺したのは、次のような経緯であった。愛子は、この前の松田の「人類愛」に関する熱烈な説教に感化され、自分の家の表に住んでいる寂しそうな老人が「かわいそう」に思われ、つい「愛」を施した。それから老人は愛子に対してしつこく「結婚」を迫るようになり、途方にくれた彼女は死にたくなって、自分が飲もうとして青酸カリの溶液を用意した。が、老人が公園でまた愛子に結婚を求めてきた時、彼女は思わず「これのんで」とそれを渡してしまったのであった。「先生があんなこといわなかったら!」「あのおじさん、殺したのは、わたしじゃないわ、ほんとは先生なのよ!」と叫び、彼女はドアの外へ飛び出して行った。松田がふらふら鏡の前に行くと、そこには、年寄りみたくグロテスクな悪魔のような顔が写っていた。

少し長くなったが、これで作品は終る。ここで、先ずはこの小説を読んで行く際、引っかかるところ、つまり、上述したように謎めいているところからまとめておきたいと考える。

第一に、主人公の抱いている「人類愛」への過度な陶醉感。第二、その主人公の「人類愛」に関するたった一回の説教で老人と関係を持つ愛子の心境。第三、老人が倒れながら唇が主人公の手に当たったというところで、物理的な動きを想像してもさほど自然ではないが、そうなったらなったでどうともないことを、死の烙印だの、自殺への不吉の予言だの、大げさに震え怯える主人公の言動。第四に、似ている話だが、小説の中にところところ出てくる、事件と無関係な、否、関係があるとしても何のことか分からない突飛で奇妙な主人公の感想。第五に、必ず二つである必要もなさそうなのに、繰り返して出てくる、二匹の犬、二人の女、二人の兄弟、二つの応援団、二つの麻雀卓。最後に、これは謎ではなく、ただの不満だが、最初は主人公のハッターリに犯人が引っ掛かったように見せかけておい

て、作者は、妻とメカケが死んだ犬の死体を犯人でもないのに探し回った理由を説明しない。枚数のこともあり、作者の何かの意図により省かれたろうけど、これでは構成面上、緻密でないとと言われても仕方がない。以上、取り上げられる謎のようなものは全部述べたが、このような引っ掛かる個所個所を、椎名の小説に全く馴染んでいない読者からして、どれほど理解ができ、どれほど主人公の心境が追体験できるものであろうか。結論から言って、これらは椎名のキリスト教信仰が理解されない限り、ほとんど意味不明だし、主人公のように独り善がりの陶醉、たわ言で終わってしまう。というのも、例えば、老人の家から二人の女が出てくるのを待ち伏せしている場面で、急に、「徳松は暮れて行く空を見た。そこにだけしかほんとうの自分がいないようにだ」とあるが、椎名のことが分からない人の中で、これを読んで、何のことか分かる人がいるだろうか。

### 3. 「接吻」を手がかりに

さて、椎名の主張に耳を傾けるのが本稿の目的なので、その点を念頭に入れながら謎たちを一つずつ解いていきたいと考える。先ず第一の主人公の「人類愛」への過度な陶醉感。小説のはじめからこの主人公の「人類愛」に対する感激というのがどうも不自然で、仮にそのような人間もこの世に実際にいる筈だと辛うじて受け入れたとしても、あまりにも尋常でないので、滑稽と言うより気味が悪い。人類愛を叫んでいるのに、一つも人間的でないで、彼の陶醉感に全く乗る気がしない。この「人類愛」というのが後程の悲劇(殺人)につながる、事件の発端として置かれているのは読み終って分かるけれど、何故彼がそのような崇高そうな思想を持ったのかの説明が無い。また、第二の愛子においても、酔っ払っているようにしか見えない彼の説教の一体どこにそこまで胸を打たれたのか、何の説明もない。強引に引っ張って無理矢理、殺人事件の因果関係を結んでいるようで、どうもすっきりしないのである。

しかし、このような不自然な人物造形は、事件の因果関係の構成のためではなく、作者の主張を作品のなかに盛り込むためだと思われるのだが、ここから、第三の謎、老人の「接吻」ということを手がかりに論じて行きたいと考える。この「接吻」の意味を理解することが、第一、二を含め、他の謎たちのほとんどを解いてくれる鍵になるからである。

この、老人からの「接吻」というモチーフは、明らかにドストエフスキー「カラマーゾフの

兄弟)(一八七九～一八八〇)の中の、第二部五編、物語詩「大審問官」からの影響である。「カラマーゾフの兄弟」は、作者の後期五大作の一つで、「罪と罰」と並んで彼の最高傑作と呼ばれる作品である。貪欲な地主カラマーゾフの殺害事件をめぐる、放蕩な生活をする長男ドミートリイ、冷淡な性格の無神論者の次男イヴァン、博愛主義者で修道僧の三男のアリョーシャが、父親殺しの嫌疑がかけられた長男の刑事裁判にそれぞれ立ち向かうことを描いている壮大な長編小説である。その中で次男が三男に語る物語詩「大審問官」は特に有名で、作者の神とキリストに対する重い懷疑と鋭い洞察が盛り込まれている、一つの独立した作品としても遜色のない傑作である。話の背景は十五世紀のイスパニアで、ほんもののイエスと思われる人物が異端として捕まっている。九十歳程度の大審問官が直々に審問するが、彼は一言もしゃべらない。大審問官だけがながながとイエスを非難し、人類のために思って彼らを奴隷にしてやったと強弁する。話が終ると、イエスは大審問官に接吻しその場を去る。

これについて、椎名は、次のように述べている。

私は、ショックを感じていたのだ。大審問官の色あせた唇に接吻をしたキリストの姿にである。キリストの接吻それは明らかに大審問官に対する愛と同時に同意の印である。しかしまた明らかにその接吻は、大審問官のいままでの夢中に述べて来た一切の言葉を無にするような、大審問官に対する超越と同時に拒絶の印でもあったのである。ドストエフスキーの全作品を読んで来て、はじめてキリストが私にとって身近に感じられたというだけではない。そのキリストの姿に、何か私の知ることのできないものに根拠をもつ、ほんとうの自由の光が感じられたのである。<sup>3)</sup>

引用の最後のほうに「ほんとうの自由の光」とあるが、その「光」は「同意」と「拒絶」という相反するものどうしがそこに「同時」に存在した時、椎名に初めて感じられたということが分かる。言い換えれば、矛盾しているものどうしが「明らかに」共存するその瞬間、「ほんとうの自由」、救いのような何ものかが予感されるのである。その「印」がキリストの「接吻」なのである。「公園の詩人」の「接吻」は、正にこの、「同意(生)」と「拒絶(死)」の印、その狭間のなかにあると思われる、「ほんとうの自由」、救いへの予感なのである。

救いへの予感、つまり「ほんとうの自由」への予感というのがこの「光」として現れるという着想は、人間にとっては古今を問わずに生まれつきの本能のようなものであろうし、事

3) 椎名麟三(1966.11.)「カラマーゾフの兄弟」雑誌「月刊キリスト」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』第20、冬樹社、p.172

さらに断わっておく必要もないだろうが、この「救い」への印象として「光」は、椎名にとっても、デビュー作の「深夜の酒宴」(昭和二十二年)から、中期の「美しい女」(同三十年)の世界を経て、晩年の最後の長編「懲役人の告発」(同五十四年)にまで一貫して作品中で使われている。

そして、椎名は、「大審問官」物語のみならず、同じドストエフスキー「悪霊」(一八七一～一八七二年)からも「光」を予感する記述があるのだが、「悪霊」のなかには、「女の子を辱めたり、けがしたりしても」、「敵討に脳味噌をたたきつぶしても、それでもやはりいい。また、(略)たたきつぶさなくてもそれもやはりいいことです。(略)もしそれを悟ったら、小さな女の子を辱しめなどしなくなるでしょう」との箇所があり、これもまた作中無神論者キリーロフのせりふで、椎名はそれを読むたびに、「何かしら新鮮な、私のまだ知らない「ほんとうの自由」の光が、私の心のなかにさっと差し込むのを感じる」<sup>4)</sup>と述べている。

「公園の詩人」の冒頭に、工場の窓から洩れてくる光を見て、主人公は「何かこの世ならぬ新鮮な光に見えた」とあるが、十年経ったこの評論でもそのまま「新鮮な(略)光」と書いていることが分かる。この「光」こそ「ほんとうの自由」のイメージとして初期から椎名に印象づけられており、作品の中でも繰り返して使って来たことは上でも述べた。椎名の世界において「光」は「ほんとうの自由」のメタファーであり、「公園の詩人」の冒頭の「光り」というのは、最初から主人公が「ほんとうの自由」を予感もしくは願望していたと言えよう。

ならば、椎名の言う「ほんとうの自由」とは何を意味するかについて考えて行きたい。ここに椎名の思想の根幹をなしている「同時性」、そして似通っている概念ではあるが「二重性」としての「復活」というのが浮上してくる。大審問官へのキリストの「接吻」から彼の読み取ったという「同時性」、つまり「同意」であると同時に「拒絶」でもあるという思考、これは、「生」であると同時に「死」でもあるという椎名特有の「復活」理解に関わっている。椎名の言う「ほんとうの自由」は、正にこの「同時性」、即ち「二重性」としての「復活」から得られるものなのである。

何度も「自由」と言っているが、椎名の言う自由はどのようなものなのか。束縛があるとしたら、それは何から来る束縛なのか。遠藤周作が、「氏が繰り返して述べてきた主題は自由の問題であり、その自由とは何よりも死からの自由であることは今更、私が言うまでもない」<sup>5)</sup>と書いているように、椎名の「自由」は「死」からの自由であり、彼は「異常なまで死を

4) 椎名麟三(1966.6)「悪霊」雑誌「月間キリスト」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.135)

5) 遠藤周作(1956)「椎名麟三論 微笑を取りめぐるもの」『文芸』(ただし引用は、本田秋五ほか(1979)『椎名麟三全集 別巻 研究編』、冬樹社、p.300)

恐怖<sup>6)</sup>した。より厳密に言うと、彼が求めた「自由」というのは、「死」という厳然たる「絶対的な」事実から逃れるための精神的な基盤であった。結果的に、彼は文壇デビューわずか三年後の昭和二十五年、キリスト教の洗礼を受け、「死」を信仰の世界で克服し、彼の居場所を得たのである。

そして、彼が「死」の恐怖とその束縛から逃れ、ドストエフスキーから「新鮮な光」として予感していた、彼にとっての「ほんとうの自由」というのは、ほかでもなく、イエス・キリストの「復活」への独特な理解のうえに成り立つ。イエスの「復活」について、椎名がどのように把握しているのかが端的に表れている文章がある。次を見よう。

同時に死んでいて生きているイエスの二重性は、私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちに、打ちくだいてしまったのである。

(略)言いかえれば死ではあるが絶対的なものでなく、生であるがそれも絶対的なものではない。私たちの考える二つの絶対、生の絶対性と死の時間の絶対性(略)を超えて存在しておられるのである。私たちの絶対的な必然性と考えている壁がここではくずれ落ちている。しかしそれこそ「ほんとうの自由」というものではないか。<sup>7)</sup>

「ほんとうの自由」、つまり「死」で象徴される、あらゆる「絶対性」の束縛からの「自由」は、このように、「死んでいて」、「同時に」「生きている」という性格の「復活」理解から得られるものである。言い換えて椎名における「復活」は「二重性」を帯びたものでなければならない。つまり、「死」であると「同時に」「生」でもある。「同意」であると「同時に」「拒絶」なのである。椎名のこのような、矛盾したものどうしが「同時に」存在し得るという理解により、「絶対的」であったものたちは、もう一方と相殺し、「絶対的な必然性と考えている壁がここではくずれ落ち」、「ほんとうの自由」につながるのである。

「死」を含め、あらゆる「絶対的な必然性」、「絶対的に」過度に陶酔していたもの、「絶対的に」過度に執着していたもの、「絶対的に」過度に振る舞ってしまう、過度に思い込んでしまうあらゆるものが、実は「ほんとう」でなく、つまり「絶対的な」ものではなく、真の「ほんとう」というのは、イエス・キリストの啓示したの「同時性」「二重性」に属するものだ、それが救いなのだというのが椎名特有の「復活」思想なのである。主人公が空を見上げてあそこにしか「ほんとうの自分がいない」といわせるのも、そういう脈絡なのである。

6) 奥野健男(1964)『文学は可能か』角川書店、p.148

7) 椎名麟三(1966.4.)『「復活」と私』、雑誌「信徒の友」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.260)



第一の謎で、主人公が感激し切って、「すべては許されているんだ」など言っているのも、敢えて主人公を端から見て敬遠されそうな人物、気ちがいめいたところのある人物のように設定し、陶酔して何でもしゃべるような態度をとらせておき、実は、作者自身がドストエフスキーから見たという「ほんとうの光」、イエスの「二重性」のビジョンを読者に伝えているのだ。それ故、上で見てきたドストエフスキー「悪霊」の中のキリーロフの矛盾した台詞と全く同じことを言わせているのである。

「ほんとうに辛い」、「ほんとうに死にたい」など、ものごとを「ほんとう」だと考え、それに「絶対的」に捕らえられ、過度なまでに思い込んだり、振る舞ったりして、悲劇を自ら招くことは止しなさい、なにしろ、キリストの「復活」の「二重性」が「ほんとうの自由」を証明してくれているから、といったところがこの小説のテーマだとしたら、愛子が彼の空っぽの説教に感化されたのも理解できなくもない。主人公の松田も愛子も過度なまでにある一方へ突っ走る危険な傾向があり、愛子は「かわいそうだから」というのを理由で、老人とも関係を持ち、自分の元先生とも関係を持つとするのである。愛子のこの、「可愛そうだから」だれとでも関係をもつという設定は、実はちょうど一年前に発表された「美しい女」(昭和三十年)の登場人物の一人、ひろ子にそのまま使われていた訳で、彼女を一年後のこの作品にもう一度連れ出してきたというのは、モデル自体への愛情もあるだろうが、無垢なところが反って過度なところにまで突き進んでしまうという事をもう一度書きたかったのかも知れない。ちなみに、「美しい女」ではひろ子が主人公に結婚を迫る存在で、この「公園の詩人」はそれへのパロディーになっているとも言える。

この節のまとめとして、この作品は、「接吻」という出来事で、イエスの「復活」から得られた「二重性」の福音への予感を漂わせながら、主人公、愛子、死んだ老人のそれぞれの過度さがゆえに訪れた悲劇を描き、それを警戒しているのだと言えよう。最初、主人公は「新鮮な光」として「ほんとうの自由」を予感しつつも、過度な昂揚感に酔っていたため、ただの予感段階に留まり、その後、「生」と「死」の「二重性」の意味合いをもつ「接吻」を受け、一度奈落に落された。それから、ある瞬間、空を見上げて、そこにしか「ほんとうの自分」がない気がしてくる。「ほんとうの自分」とは、「ほんとうの自由」を得た境地のことと理解していいであろう。そして、自分の持っていた、これぞ真理だと言わんばかりの「絶対的」な人類愛への陶酔により、一人の老人と元教え子に訪れた悲劇を目の当たりにしてから、最後に主人公はどう変わるのであろうか。小説には書いていないのだが、作者の弁証法的な「復活」理解からすると、「生」と「死」の次に待っているのは、「二重性」としての「復活」への回心であろう。

#### 4. 「二人」をめぐる

「公園の詩人」の中の謎たちは、「接吻」をめぐる椎名の「復活」思想を理解することでたい解消できた。話は半分しか来ていないのだが、とりあえず、解き残している謎は一つである。最後にあった、繰り返して出てくる「二匹」の犬や「二人」の女などに関する問題である。作品の最初のところで、主人公の陶醉している気分を描写する冒頭には次のような記述がある。公園から見える、工場の窓からの光を見て主人公はこう思う。

何かこの世ならぬ新鮮な光に見えた。目の前のグランドの金網のまわりを野良犬が二匹もつれ合いながら、先刻から意味もなくグルグル追いかけてっ子をしていた。それはたがいに追われたり追ったりしているので、どちらが鬼だかさっぱりわからなかった。しかも空には星があった。それは深遠ではかることのできない宇宙の神秘が<sup>8)</sup>……(略)

このように、工場の窓からは例の新鮮な光が見え、二匹の犬がたわむれ、空には星があつて云々となっていて、何の変わりもない普通の情景描写のようだが、よく考えてみると、「この世ならぬ新鮮な光」と「宇宙の神秘」の間に差し込まれている、この「二匹」の犬の存在は、どうもこの場に似つかわしくない気がしなくもない。もちろん、この犬の存在が後の主人公のおとり捜査にもつながるのだが、敢えて二匹にする必要はないであろう。老人の妻とメカケにしても同じことが言える。二人の共謀しての殺人という風に思わせ読者を翻弄する本格的なものでもないのに、敢えて「二人」として設定し、「肩を寄せあうようにしながら」とか「身を寄せるようにして」公園の周囲を歩くなどの描写を入れて何の小説的な効果があるのだろうか。ほかにも主人公の息子と娘など、事件に何の関わりのない「二人」の組み合わせを次々と登場している。

この「二人」の存在というのを作品にしばしば登場させ、不思議で不気味な世界を作り上げている文学者と言え、真っ先に思い浮かんで来る人がいる。言うまでもなく、フランツ・カフカである。「城」(一九二三)、「審判」(一九二五)、「アメリカ」(一九二七)など、代表作のいくつかだけを思い出しても分かるように、その正体がはっきりしない気味の悪い「二人」がいつも主人公にまとわりついている。「公園の詩人」の中の「二人」の存在は、まさにこのカフカからの影響だといえよう。というのも、作者自身そのことを『創作ノート』で触

8) 椎名麟三(1956.12.)「公園の詩人」、雑誌『小説新潮』(ただし引用は、椎名麟三(1971)『全集』7、p.194)

れているので、それについて検討して行く。作品中にあまりにも頻出するので、ほぼ濫用に近いとまで思われるこの「二人」の存在で、椎名は如何なる効果を収めようとしたのか。

先ずは、カフカから、彼の「二人」はどのようなものであったのかについて考えておきたい。ここに、「ブルウムフェルト、ある中年の独身者」(一九一五)という短編がある。自分の下宿に帰った主人公の前に「思いもよらない光景」が広がることで始まっている。

白い小さなセルロイドのボールが二つ並んで、寄木張りの床の上を跳びはねている。一方が床を打つときには、他方は上に跳びあがっているというぐあい、どちらも孜々としてその遊びをつづけているのである。9)

この「二つ」のボールに悩まされた主人公が夜を明かし、やがて会社へ行くと、今度は愚かな「二人」の助手に付きまといられる。この二人は、小学校卒業ぐらいの「蒼白い虚弱児童」で、狭い事務所に立ったまま何の役にも立ちそうにない。やがて彼らは上役をだます「ずるさ」だけは持ち合わせている。出世根性もなく、「義務意識もない」。小使いに「嘆願」するかと思うと箒を取り、投げ出す。「過度に臆病で、始終思いやりなど露ほども持たずに、実際の権利やら見せかけの権利やらを守ろうとするのである」。谷口茂は、この小説について次のように述べている。

『ブルームフェルト、ある中年の独身者』は、一九一五年二月八日から書き始められ、程なく中断したもののだが、この執筆時期が注目されるのは、それが一月末のフェリーツェとの再会の直後だからである。(略)彼女との再会後しばらく、創作意欲の減退も与って、彼は沈滞した気分の中に過さなければならなかった。しかし最大の原因は、彼女との折角の再会が結婚への新しい展望を何ももたらさず、逆に結婚への躊躇を再確認させる結果に終わったという点にある。それにもかかわらず彼が彼女との結婚問題にかかわり続けたのは、結婚が「つまりはユダヤ男としての義務感に基づく一種の理性結婚の試みであったと同時に、作家として《中休みの時間》に縋りつくことのできる支えの問題だった”(略)からである。(略)作家である彼としては、このジレンマの様相を作品化してみるしか手がないだろう。10)

そこで、この小説が生まれた。この悩ましい「ジレンマの様相」が、つまり、ユダヤ男としての結婚への義務感と作家として仕事に専念したいという願望が衝突して、そのような

9) フランツ・カフカ(1953)『ブルウムフェルト、ある中年の独身者』『カフカ全集』、新潮社、p.373

10) 谷口茂(1983)『フランツ・カフカ論—ユーデントゥームとの関係を中心に—』明星大学出版部、p.256

心の葛藤が、主人公に付きまとう「二つ」のボール、そして「二人」の助手として具現されたということである。また、カフカの一生の友で、彼の編集者としてよく知られるマックス・ブロートも、カフカを苦しめた婚約解消のことについて次のように述べている。

カフカは、このようなはげしい心の動揺のうちに、繰り返し繰り返し自分自身に対して良心の問題を提起して来たが(「このような苦痛に耐えなければならないこと、このような苦痛を惹き起こすこと」という歎きが日記に載っている)、そうした経験こそ、婚約解消の直後に出来た二つの新しい大著の源泉である、と見なしでも見当ちがいでないと思う。<sup>11)</sup>

婚約解消という事件がカフカに「はげしい心の動揺」、「苦痛」をもたらし、しかも彼はそれに耐えつつ、想起し続けることで自分を罰し続けようとしたことが分かる。そんな彼が、一度破綻した婚約者に再会したのにも関わらず、結婚へと移れず、またもや躊躇しているばかりの自分を再確認して、「出世根性」も「義務意識」もない、「過度な臆病」ものと自分への罵倒を込めて、作品のなかの「二人」を造形したのであろう。そして、「思いやりなど露ほども」ない、決して歩み寄らない双方のジレンマは、カフカがフェリーツェに送る次の手紙でその姿をはっきりしている。婚約解消後初めての手紙であった。

僕の中には互いに戦う二人がいたし、今でもいます。一人はほとんど君が望んだ通りのもので、君の望みを実現するために欠けているものも、この者ならこれからの成長で達成できるでしょう。アスカーニッシャー・ホーフでの君の非難のどれも彼には関係ありませんでした。しかしもう一人は、ただ仕事のことだけを考え、仕事が唯一の心配であり、仕事によって最も低劣な考えとも無縁でなくなります。親友が死んだところで、一時的にはあれ、何よりもまず仕事の妨げとなってしまうのです。<sup>12)</sup>

カフカが自ら述べているように、そうした「戦う二人」が「二つ」のボールや愚かな「二人」の助手、そして他の作品のなかの様々な奇妙な「二人」として表現されていることが分かる。

ならば、椎名にとって「二人」はどのような意味を持つのであろうか。既に上で見てきたので、答えは知っているのだが、それを踏まえて「公園の詩人」に戻りたいと考える。一先ず、椎名は例のカフカの短編について次のように述べている。

11) マックス・ブロート、辻理ほか訳(1955)『フランツ・カフカ』みすず書房、p.176

12) 村上浩明(2001)『『流刑地にて』—戦う二人—』古川昌文ほか『カフカ中期作品論集』同学社、p.20

カフカの『ある中年の独身者』を読んだ。二つのボールが(ピンポン玉のような)彼の部屋のなかで、カタカタ音をたて、彼の背後につきしたがうことと、事務所で年若い助手たちに悩まされることが、並列して書かれている。このボールの場合、一つであった場合は、あるおそろしさ、ある意味が感じられる。いわばそれは絶対的な何かをあらわしているからだ。ただ、それが二つとなると、ユーモアとなる。それが喧嘩し合っているとすると、なおいいだろう。(略)二つの否定の同時性。(略)一方が『救われてない』といえ、一方は『救われている』というのだ。<sup>13)</sup>

と。カフカの中のジレンマの表れ、「互いに戦う二人」は、椎名にとって、例のイエス・キリストの「同時性」として取られていることが分かる。「一つであった場合は、あるおそろしさ、ある意味が感じられる」とあるが、これは、あい対するものがない状態、「対」を「絶」して一つとして「絶対性」を帯びたものごとであり、これの窮極な地点には「死」という「必然性」がある。それを「二つ」にすることで、イエスの「復活」の「同時性」、「二重性」のビジョンが形を持ったものとして表象される。この「同時性」に関する椎名特有の復活理解については既に上で詳しく検討してきたので、ここでは割愛することにする。

主人公に関係している犬、妻とメカケ、息子と娘などの「二人」という装置は、「死」の帯びている「絶対性」を押さえ、剥奪する意味合いで機能していたと考えられる。そして「二重性」として理解される作者の「復活」思想を伝えるための文学的な手段としても、カフカの「二人」は非常に有効な手法であったと言えよう。

最後に、老人の死んだ公園に警察官が現れ、主人公が第一発見者として調査を受ける際、警察官は二人ではなく「三人」であった。今度は二人でない方が不自然な場面なのに、作者は敢えて警察官を三人にしている。それは、その場を司る存在、或は悲劇と無関係な地点に立っている観察者などを「三」として表したかったためだと考えられる。

あれかこれかの外に、あれかこれかを越えたところの第三の場所をもっていなければならないということなのである。その第三の場所は人間に、だからこの世界のどこにも存在しないというのが、私たちのいままで知った認識なのである。(略)イエス・キリストという方がやって来て、人間には不可能なその場所をつくって下さったのだ。イエス・キリストから恵みとして与えられた自由こそがその場所なのである。こうしてキリスト者は、現代のあらゆる絶対性に対して強力なたたかいを展開し得るものとなっているのであり、その意味においてキリスト者は現代においてもっとも前衛的な立場におかれているのである。<sup>14)</sup>

13) 椎名麟三(1981)『夜の探索』『創作ノート』、菁柿堂、p.76

14) 椎名麟三(1963.5)「ユーモアについて」、雑誌『月間キリスト』(ただし引用は、椎名麟三(1976)『全集』)

このように、作者の「復活」に対する弁証法的な思考は、「死」でも「生」でもない「第三の場所」を想定することにつながっている。椎名麟三の筆名が既にそうであるように、彼の求める「ほんとうの自由」は、「復活」により「つく」られた「第三の場所」で初めて手に入れられるものである。我々の「あれかこれか」を抜け出た「外」の「第三の場所」への希求が三人の警察官に暗示されているのであろう。

## 5. むすびに

本稿では椎名麟三の推理小説「公園の詩人」を論じた。この作品には展開の不自然で、気味の悪い謎たちが多く、それらを解くためにドストエフスキー「大審問官」物語からの着想である「接吻」を手がかりにして、作者の独特な「復活」理解を踏まえ、謎めいていたところの解消を試みる一方、そのような作業から汲み取られるこの作品での作者の真の主張を読み取ろうとした。また、カフカから借りてきている、主人公に付きまとう「二人」という手法を中心に、二人の作家の間にはどのような差があるのかを明確にし、椎名流の「二人」は作品のなかでどのように機能しているかを論じた。

さて、この作品の謎はもう一つあって、それは彼が「死の烙印」の「接吻」をされ、彼が自分に一体何の罪があるんだろうと考えた時、彼の頭をよぎった妙な考えについてである。それは、主人公の抱いているある感情、だれという訳でもないが、公園で何かを待っているという漠然とした甘い期待感のことで、それが何故「中年男の恥ずべき」罪だということか、という問題である。この作品に関しては上で散々不満を述べて来たので、これ以上言うつもりはないが、やはり宗教性が押さえきれず溢れでているので、今じゃないと思わせる突飛な挿絵が目障りなのである。それはさておき、このサミュエル・ベケットを思わせる叙述は、椎名のごく初期の作品「深尾正治の手記」(昭和二十三年)からよく問われるモチーフで、この作品のみならず、椎名の文学世界においてどのように働き掛けているのか、今後の課題にしたいと考える。

**【参考文献】**

- 奥野健男(1964)『文学は可能か』角川書店、p.148  
佐々木基一(1954.2.1.)「文芸時評」『日本読書新聞』  
椎名麟三(1971)『全集』7、冬樹社、p.194  
\_\_\_\_\_ (1974)『全集』15、冬樹社、pp.403-406  
\_\_\_\_\_ (1976)『全集』19、冬樹社、pp.513-514  
\_\_\_\_\_ (1977)『全集』20、冬樹社、p.135, p.172, p.260  
\_\_\_\_\_ (1981)「夜の探索」『創作ノート』、菁柿堂、p.76  
谷口茂(1983)『フランツ・カフカ論—ユーデントウームとの関係を中心に—』明星大学出版部、p.256  
平野謙(1954.2.2.)「二月の文芸作品を読む」『北海道新聞』  
フランツ・カフカ(1953)「ブルウムフェルト、ある中年の独身者」『カフカ全集』、新潮社、p.373  
本田秋五ほか(1979)『椎名麟三全集 別巻 研究編』、冬樹社、p.300  
マックス・ブロット、辻理ほか訳(1955)『フランツ・カフカ』みすず書房、p.176  
村上浩明(2001)『『流刑地にて』—戦う二人—』、古川昌文ほか『カフカ中期作品論集』同学社、p.20

---

논문투고일 : 2021년 06월 30일  
심사개시일 : 2021년 07월 14일  
1차 수정일 : 2021년 08월 04일  
2차 수정일 : 2021년 08월 12일  
게재확정일 : 2021년 08월 20일

---

 <要旨>
 

---

## 椎名麟三「公園の詩人」論

- ドストエフスキー「大審問官」物語を手がかりに -

金慶湖

「公園の詩人」は、主人公の教え子の愛子が主人公の説教を「ほんとうに」「絶対的に」受け入れてしまい、ある老人と愛し、その後「ほんとうに」死にたいという感情に取り付かれ、結局老人を死に至らせてしまった悲劇を推理小説の形式で描いている。ところで、この作品には展開の不自然で、気味の悪い謎たちが多くあり、それらを解くためにドストエフスキー「大審問官」物語からの着想であるキリストの「接吻」を手がかりにして、作者の独特な「復活」理解を踏まえ、謎めいていたところの解消を試みる一方、この作品での作者の真の主張を読み取ろうとした。

さて、この作品で作家は「二人」の女や、「二匹」の犬などを登場させているが、これはカフカからの影響である。しかし、カフカは、「二人」の対立の様子を記し、自分のなかの「ジレンマ」を表しているのに対して、椎名の「二人」は、カフカのように心の中の葛藤を表したのではなく、むしろその葛藤が解消される境地を描こうとしたのであった。つまり、カフカから借りた「二人」の手法をイエス・キリストの「復活」の福音を伝える手段として使ったのである。その福音、即ち椎名の理解している「復活」のビジョンがこの作品の真の主張であるのだが、その椎名特有の独特な理解は、キリスト教の救いとして一般的に知られる天国への思し召しや永遠なる生などを意味するものではない。それは、この世の不幸やそこから生じる絶望的な気分などを「絶対的に」受け止めるべきではない、あのイエス・キリストにより「ほんとう」だと信じ込んでいたあるゆる「絶対的な」ものはあの「死」さえ消し去り、今や「二重性」としての「ほんとうの自由」がキリストによりわれわれに啓示されているのだということである。

 A Study of Shiina Rinzo's *The Poet in the Park*

Kim, Kyung-Ho

“*The Poet in the Park*” is a mystery novel about a tragedy that ended up killing an old man. Aiko, the main character's student, accepted the main character's sermon “really” and “absolutely”. So she had a relationship with an old man and then became obsessed with the feeling that she really wanted to die. However, there are many unnatural and creepy mysteries in this work. Then to solve them, I tried the author's unique understanding of “resurrection”. On the other hand, I tried to read the author's true opinion in this work using the keyword of Christ's “Kiss” inspired by the story of Dostoevsky's “Great Inquisitor.”

By the way, in this work, the writer features “two women” and “two dogs” those are influences from Kafka. However, Kafka describes the conflict between the “two person” and expresses his dilemma. On the other hand, Shiina's “two people” did not express inner conflict like Kafka. Rather, he tried to portray the situation in which the conflict could be resolved. In other words, he used it as a means to preach the gospel of Jesus Christ's resurrection using a technique “two people” borrowed from Kafka. The gospel, the vision of “Resurrection” that Shiina understands, is the real argument of this work. His unique understanding of the vertebrae does not mean the devotion to heaven, or eternal life, commonly known as Christian salvation. It means that we should not accept the misfortunes of the world or the desperate feelings as “absolute” things. By that Jesus Christ, all the “absolute” things that we believed to be “true” disappeared even that “death”. This means that “real freedom” as “duality” is now being revealed to us by Jesus Christ.